# 第15回　夏期福音特別集会（鹿沢）（３）

# 神の奥義――エペソ書第３章――（縮小抜粋版）

１９６８年８月24日
小池辰雄

16 **どうか、御父が、その豊かな栄光に従い、その霊により、力をもってあなたがたの内なる人を強めて、**

と。御霊によるところの力でもって汝らの内なる、一番根源的な新次元の人を強くする。キリストの前にそのまま自分を投げ出す。自分の信仰でも力でもない。御霊の助けによって、「主さま！」と叫(よ)ぶ。あるがままに自分を投げ出す。何も恐れることはない。どのような苦しい事態も、苦しいままにそこにただ平伏(ひれふ)す。そうしたら、必ずその助けがきます。

17 **信仰によってあなたがたの心の内にキリストを住まわせ、**

「主さま、あなただけです」ということ。自分の何かが信仰でも何でもない。

**あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださるように。**

18 **また、あなたがたがすべての聖なる者たちと共に、キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し、**19 **人の知識をはるかに超えるこの愛を知るようになり、そしてついには、神の満ちあふれる豊かさのすべてにあずかり、それによって満たされるように。**

真に「神―キリスト―我」となった個ならば、決して孤独の孤ではありえない。必ずこの個は、互いに交わるところの「コイノニア」に展開する個です。そういう交わりの事態を集会、教会、召団という。神に呼ばれて、呼び出された者がまず個である。そして、これがコイノニアになる。私たちは何らかの集会に入っていて、その集合的な実体を「キリストの体(からだ)」という。キリストの体、有機体としての霊的な、霊化されたところの人格体。切っても切れないところの有機体的な関係になっているもの。それが「キリストの体(からだ)」です。

神・キリストの霊が私たちと同じ平面の上に立ってくださっている。この神・キリストが大黒柱になっているところの幕屋的構造です。旧約から新約に至るまで「幕屋」という大事な実存体を新約聖書では「教会」という言葉でいわれている。救いの基(もとい)はそういう群れです。群れの中に入ってきて救われるというのが救いの現実です。神の召しというものは、召団、幕屋的な体的な多であって、キリストの愛の対象となっているものは、その一つひとつの個であると同時にその群れの全体である。キリストの愛は、本願の究極のところは人類全体の救済、万人救済にいくけれども、具体的なそういった集まりの存在に顧みがくる。

その全体がまたキリストの大きなエクレシアである。そのひとつびとつの集会というものが、「聖霊の幕屋」であり、全体としては「キリストの幕屋」であり、それがやがてキリ

ストの日がくると、黙示録でいわれているところの「神の幕屋」ということになる。

それがキリストの愛の対象です。私たちはキリストにそのようにして愛されている。我々一人びとりに対する顧みというものは、いろいろな表れ方をして、その個に対して愛が表れている。キリストの愛の表れ方は千変万化です。「愛」というひとつの言葉は決して、内容がひとつではない。私たちは個として、また、群れというひとつの有機体、一なるところの在り方に対するところのキリストの愛を受けとる。

キリストは私たちの罪を贖いとる。キリストは罪びとの首となった。私たちのいかなる事態に対しても、全部それを彼は背負った。それが十字架ということ。このキリストの愛というのは、そういった贖いの、徹底的などん底に立ったところの、万人に向かって例外なくなさっていくところの愛です。キリスト教の歴史をみて、いかなる教会も完全無欠な教会はない。我々の幕屋といえども、どこの集会といえども、みな疵ものです。どのような事態であっても、それが人間の事態であるかぎり、みな完全なるものはひとつもない。

私たちは京都の集会、信州の石垣会、東京の武蔵野集会、いろいろある。これが一緒に一年に一回このような大集会をする。これは単なる「組織」ではない。おのずから聖霊のあるところには交わりがある。交わりがないならば、これは聖霊のある世界ではない。その交わりはキリストの愛の交わりである。「傷める葦を折ることなく、ほの暗き灯火を消すことなし」という、深い思いやりの世界です。本当の思いやりは担いの精神です。担いは、聖霊がなければできない。この個が聖霊に貫かれれば、どうしても交流が始まって、これが有機体的な群れとなる。私たちは人間としては惨憺たる者です。けれども、その惨憺たる者が聖霊によっては変貌している。その変貌の根源の現実、根源のあなた方一人びとりが決してダメでないというのは、この「聖霊の宿り」ということがはっきり言えるわけです。

この群れ、召団、幕屋、集会、これがキリストの愛の対象となっている。私たちは、家庭、大家族の、兄弟姉妹です。友人、先生と弟子という、いろんな関係がある。それぞれの関係が正しく有機体的に構成されていくためには、どうしてもそこに聖霊がきてなければ、どの関係にしても本当に立たない。キリストの愛がそのようにかかっていく。人間界のいろんな相対的な関係も結局それが絶対的な質をもって、天的なものになるためにはもう聖霊のほかにない。この御霊によって初めてそれがやがて疵なきものとされていく。「個」としてもまた「エクレシア」としても、「栄光より栄光へついにキリストの姿に化する」ところのもの。それは「神の幕屋」となって黙示録の「新天新地」になる。祈りの世界で神の本願に圧倒されて、本願を受けとるときに、私たちはこの聖霊の世界に本当に入っていく。